

---

# 時空の狩人

中平 和空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時空の狩人

### 【Nコード】

N0931T

### 【作者名】

中平 和空

### 【あらすじ】

龍神学園高校一年生 瑠璃垣るりかき 碧透あおとは入学してから二ヶ月がたち高校生活にも慣れ平穏な日々を送っていた。

ある日の学校からの帰り道、碧透は得体の知れない化け物に突如襲われた。

そこに助けに現れたのは、碧透と同じクラスの 相野谷あいのや 緋莉あかりだった！！

その日から、瑠璃垣 碧透の現在と未来と過去で三つの戦いが始まる!!!

## プロローグ

その日も瑠璃垣るりがき 碧透あおいは普通の高校生活を送っていた。  
高校に入学して二ヶ月がたち友達も増え、だんだんクラスの雰囲気にも慣れ、

普通の高校生活を送っていた。

特にやりたいこともないので部活には入っていない。

家族は、母の瑠璃垣るりがき 伊砂いさ、父の瑠璃垣るりがき 天都たかとと  
自分で三人である。

ただ、父・天都は海外へ単身赴任中なので、実質、母との二人暮らしである。

世界中を飛び回っていて今頃はどこで何をやっているのかは碧透にも分からない。

成績は中の上くらい悪くはないが良いかと言われるとなんとも微妙な位置でとどまっている。

何不自由の無い暮らしといえばそうだが……  
碧透には唯一悩みがあった。

それは、『名前』である。

「瑠璃垣 碧透」なんとも変わった名前である。

この名前、大抵初対面の人には信じてもらえないのだ。本名だと。それだけではない。大抵の人は読めないし書けない。

「変わった名前だよね〜」なんて言葉、何回も聞いた。

他の人からすればどうでもいい話かも知れないが碧透はそうではな

かった。

名前以外は普通の人間なのと思う。

そう、その日までは普通の人間だった……

そして、時が動き出す!!

## プロローグ（後書き）

処女作です。

いろいろ酷いと思われませんがどうか暖かい目で見てください

## 第一話 すべての始まり

「ハア・・・ハア・・・」

碧透は追われていた。

それは、人ではなく化け物だった。

その姿は、黒く、黒く、黒く、まるで見ているだけで飲み込まれてしまいそうな闇、いや、ゆらめく漆黒の炎のようだった。

その炎はゆらめきながら形を変えていた。まるで、アニメやゲームなどに出てくる死神のようだった。

碧透はとにかく、まずは全力で走って逃げていた。

しかし、所詮、普通の高校生である碧透の体力が限界に近づいていく、走るペースは衰え、

あまりの疲労に脚は重く感じるどころか感覚すらなくなっていた。

(とりあえず、誰かに助けを求めよう！！人の多いところだッ)

やっとの思いで繁華街に着き、他の人に助けを求めようとした。

そのとき、すでに辺りはすっかり暗くなっていたがまだそんなに遅い時間ではなかった。

「・・・おい・・・嘘だろ!？」

目の前の光景に碧透は思わず立ち止まってしまった。

いつもならそこは、人で溢れ返るほど賑わっている繁華街だった。しかし、だれ一人としていない。気配すら感じられない。碧透は孤独だった。

しかし、気がつくまで碧透を追っていた化け物は居なかった。

誰かいないかとレストランの中へ入ると店内は明かりも付いていて奥からは料理のおいしそうなおいがした。まるで、今まで人が居たかのような温もりが残されていた。

だが、誰一人として居ない。客も、店員も、誰一人として居なかった。

あまりにも、非現実的すぎる光景に碧透は頭の中がぐしゃぐしゃになっっていた。自分でもなにを考えているか分からない。

バリリツバリバツバリツッ！！ツシャッソ！！

「えっ？」

なんと、店内の窓ガラスがすべて一斉に粉々に砕け吹き飛んだ。碧透は頭の中が混乱していたため、一瞬何が起こったのか把握でき



なかった。

現れたのは、あの化け物だった。化け物は、漆黒の炎のような影のような自分の体の一部を鋭い刃の付いた鎌へと変えていく。

その鎌も黒く黒く輝いていた。切れ味は言うまでもないだろうが相  
当なものだと碧透にも分かった。

（だめだ、もう完全追い込まれた。逃げ場なんてない）

そう思うと体中の力が抜け、床に碧透は崩れてしまった。  
まるで、魂のぬけた抜け殻のようだった。

すると、化け物はゆっくりと漆黒の鎌を振りかぶった。  
そして、勢いよく碧透の首目掛けて、大きく振られる。

ズバツツ！！

血が勢いよく飛び散った。

しかし、その色は……黒

碧透はゆっくり目を開けてみる。

すると、そこには刀で背中から一突きにされている化け物の姿だっ  
た。

化け物は、まるで風に飛ばされる砂のように消えていってしまった。  
そして、化け物が消えていくと同時に化け物を刺し殺した人物の姿  
が現れていく。

すると、そこに居たのはよく見覚えのある顔だった。

それは、同じクラスの相野谷あいのや 緋莉あかりだった。  
化け物の返り血を浴び、真っ黒に服が染まっているその姿は普段教室で見かける

緋莉とは別人のようで恐怖を感じさせた。  
しばらくの間、碧透は呆然としていた。

「瑠璃垣くん、大丈夫？」

緋莉にその声をかけられハツとした碧透の目には普段通りの緋莉の姿が映っていた。

**第一話 すべての始まり（後書き）**

うーん、とりあえずこれで

お話には大きくかわっていきませんが表現などはまだ僕には難しく、うまく出来ないものですから、随時修正していきたいと思います。

## 第二話 真実

相野谷 あいのや 緋莉 あかり

小柄な体に髪型はショートヘアで少し茶色っぽい色をしている。性格は、明るく女子にも男子にも人気でクラスの人気者である。

見た目は綺麗というよりも可愛い部類である。  
碧透的には好みのタイプだった。

(昨日見たのはなんだったんだろう?)

碧透が気づいた時には家で飯を食べていた。

(あの出来事がすべて夢だったとでも言うのだろうか?)  
しかし、夢にしては妙にリアルだったなと碧透は思う。

(相野谷に聞いてみるか?)

と、思ったがもし夢だったとしたら変人扱いされそうでやめた。  
碧透は、変わった名前ということでクラスの中では結構目立つほうだったが、

緋莉とはあまり話したことが無かった。

放課後、眠い目をこすりながらもやっと授業が終わったという達成感に浸っていた。

すると、後ろから話しかけられた。

「やってきました！今週のスーパーお悩み中ボーイ……瑠璃垣いいいつ碧透おおつつ！！！」

訳のわからんことハイテンションで叫んでくるのは、

碧透の親友の高杉たかすぎ優里ゆうりだ。中学からの付き合いである。

身長は普通大きくも無く小さくも無いが碧透よりは大きかった。

金髪で、いつもテンションが高く訳の分からないことや寒いギャグなど

碧透にかましてくるので、そのおかげで碧透のツツコミのレベルは高いものとなっていた。

「なんだい？スーパーお悩み解決団、団長、高杉優里たかすぎ ゆうりくん？」

「もう、なんだよ。折角相談に乗ってやらないこともなかったかもしれないのにさ」

「ハイハイ、お気持ちだけ受け取っておくよ。だから、もうやめろ」

と、少しきつく言っていると、優里は少し残念そうな顔で

「分かったよ。じゃあ、俺、用事あるからまたな」

と去っていった。

(あいつは相変わらずだな……)

そこへ、また誰かがやってきた。

碧透の幼馴染 咲川 さきかわ 弓乃 ゆみの だった。

幼稚園のころからずっと一緒だった。

身長は緋莉よりも少し高い程度で、髪の毛は銀色の長髪である。

あまり感情を表情に出さない。

おっとりとしているが、口調は淡々としている。

凛とした美しさの中に、可愛さを兼ね備えている。

よってクラスの男子にも人気である。

「アオト、今日は様子がヘン。大丈夫？ユーリも心配してた。」

「ああ、心配してくれてありがとな弓乃。大丈夫だから先に帰って  
てくれないか？」

と言うと、弓乃はうなずいて去っていった。

少しの間、碧透は考え事をしたあと昇降口へと向かうため教室の扉  
を開けた。

「うん？」

（今、教室からでたはずだよな？）

しかし、教室の扉の向こうにあったのは見たことも無い小さな部屋  
だった。

「どっなってるんだ？これ」

と言いながら、中に入ってみるといきなり扉が閉まってしまった。

「やっべ・・・どうしよう？開かないんだけど」

ガクンッ

すると、部屋全体が揺れたような気がした。上に向かって部屋全体が昇っていつているようだ。

「これ上に向かってるのか？」

チーン

という、音とともに動きが止まる。

「着いたのか？」

扉がゆっくりと開く。

そこには、教室があった。

「うん？」

碧透は一体何なんだ？と辺りを見回す。

「碧透くん、いらっしやーい」

そこに居たのは、相野谷 緋莉だった。  
普段教室で見る緋莉だった。

「えっ？なんで相野谷がここに？」

「緋莉でいいよ。今日、キミをここに呼んだのは私なの」

(もしかして、昨日のことが……)

と、碧透は考える。

「そ、キミの考えているとおり昨日のことについて話があるの」

(やっぱりかー！！！！)

「ああ、昨日のことについて話すのはかまわないけど、その前に聞きたい事がある」

「なに？」

「ここは一体なんなんだ？あと、相野谷じゃなくて、緋莉は一体何者？」

すると、緋莉は一瞬だけ考えたような素振りを見せた。



「そうだね。まずはそこから話そうか」

「私は、あの化け物を狩る者。私たちは、自分たちのことを『タイムハンター』と呼んでる。」

「タイムハンター？」

「うん、そしてあの化け物のことを「タイムレムナント時空残骸」と呼んでる。」

「待て、じゃあ何でその「タイムレムナント時空残骸」一体何なんだ・・・？」

「それを、話すにはちょっと長くなるよ。OK？」

そういうと、彼女は碧透の顔を覗き込むように顔を近づけてきた。

（・・・おい・・・近いよ・・・）

それにしても、可愛いなと碧透はこんなときでも思ってしまう。

そして、顔を離すと話し始めた。

数十分後

「ちょっと待てよ。頭ん中整理するから」

緋莉の話を整理すると、

まず、未来ではタイムマシンが完成された。ただし、過去にしかいけないものである。

しかし、政府はそれを歴史を変えることはならないと、安易に使用することを禁じた。

だが、それを悪用し過去を改変しようとする者が居た。そして、それは実行されてしまった。

しかし、そのタイムマシンは実際にはあまり使用した例が無く開発者たちにも、何が起こるかわからなかった。

しかし、実際に何も未来には影響が無かった。

それも、そのはずであり、たとえ誰かが過去を変えてしまっても、その時点で記憶が上書きされるからである。

例えば、人物AとBが居てAが過去へ行きBを殺害したとしよう。

しかし、Aが元の時代に帰るとBは殺されたことになっているが誰も、不思議に思わない。人の記憶ごと世界が変わってしまうのだ。

だが、タイムマシンが悪用されている以上、開発者たちは絶対に過去が変わっていることを確信していた。

そのために、研究を重ねてついに時空の歪みを観測することに成功した。

その結果、犯人は捕まった。しかし、まだ問題が残っていた。

過去が変えられるとき、時空に歪みができる。その歪みは自動で無理やり再生される。

つまり、記憶の上書きのことである。

その時、とても巨大なエネルギーが発生することを開発者たちは観

測していた。

そして、そのエネルギーの残骸は化け物や現象などなり、様々な時代へと移動し人々や動物、自然を襲い始めた。

おそらく、エネルギーが大きすぎるため暴走しているのだろう。と言われているらしい。

それが「タイムレムナント時空残骸」の正体である。

「タイムレムナント時空残骸」が人々や動物などを襲う。すると、それだけで時空に歪みができ、再生されまた、「タイムレムナント時空残骸」が生まれる。

それを繰り返していくとすべての時空は「タイムレムナント時空残骸」であふれ自分の周りの人間、大切な人、家族、そして自分自身さえも知らないうちに消えていってしまう

そして、いずれかは人間の文明さえなかったことになるかも知れない。

タイムハンターの目的はそれを防ぐことであり、緋莉もそのために戦っているという。

そして、この部屋は龍神学園高校にいるタイムハンターの集まる場所ということだった。

しかし、校内にはこんな部屋はないし、どういう原理でこの教室がつかがっているのかを聞くと

未来の技術を使って、人工的に作った仮想空間だということだった。そこに入れるのは、タイムハンターもしくは、許可を許された人のみだそうだ。

「大体の事情は分かった。しかし、いきなりそんな話されてもなあ・・・」

(いくらなんでもスケールがでか過ぎる・・・未来とか言われてもなあ)

緋莉は、少し残念そうな顔をして、

「まあ、そうだよな。信じられない気持ちも分かるよ」

「でも、これが現実なんだ」

と、緋莉は辛そうな表情見せた。

「そういえば、タイムハンターって他にもいないの？」

と碧透が尋ねる。

「ああ、タイムハンターっていうのは世界中にいるんだ」

「日本では、一つの高校に5〜6人くらいのタイムハンターが居るよ」

「ちなみに、この学校には私のほかに4人」

と、緋莉は言った。

「そして、この世界の時空間の中に私たちの本部みたいなのがあって、そのリーダーが未来からやってきて時代に、この出来事を伝えにきてくれたの」

そこまで緋莉が話すと、部屋全体に警報が鳴り始めた。

「出た。出撃ですぞ〜碧透くん」

「えっ、なに？」

警報がいきなり鳴り出したため、驚きを隠せいまま碧透が聞く。

「だ・か・ら」タイムレムナント「時空残骸」だつてば〜」

と、当たり前のように緋莉が言う。

「う？まさか俺も行くカンジですか？」

碧透が恐る恐る聞いてみると

「うん、そうだよ〜」

（まじかよ〜！！…！）

## 第二話 真実（後書き）

説明ばつかですいません  
次回もこんな感じですよ。

説明ももっとうまく書けるようになりたいです。  
今回はきりが悪いですが力尽きたので

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0931t/>

---

時空の狩人

2011年10月9日01時22分発行